

バンコク日本文化センター一般講座の変遷と再検討 —タイの日本語教育における位置付けと役割—

大竹啓司・熊野七絵

1. はじめに

国際交流基金は海外に 19 の事務所（日本文化センター(8)、日本文化会館(3)、事務所(8)）を開所している。そのうちバンコク、ジャカルタ、クアラルンプール、ソウルの日本文化センター、ローマ、ケルンの日本文化会館、ブタペスト、カイロの事務所では一般成人学習者を対象とした日本語講座が開講されている。各講座はもともと大使館付属の日本語講座から移管されたものであったり、まだ学校や民間機関で日本語教育を受ける機会が十分でない場合の学習者支援、あるいは日本語教育普及のための動機づけとして実施されてきた。

一方、平成 17 年度日本語グループ事業計画年間基本方針では「海外事務所におけるモデル日本語講座開設の検討」が打ち出されている。これは「基金が海外における日本語教育の自立化及び現地化を支援する一方で、日本語教育基盤の整備の程度に関わらず、自らが日本語教育の中核機関として、教授法（含む教師養成）、教材および試験（能力測定）に関する基金ブランドとしての一定の『スタンダード』や『モデル』を提供すること」を目指すものである。この「モデル化構想」は海外事務所における日本語講座開設のみでなく、日本語スタンダードの策定、日本語能力試験内容の抜本的な改訂、基金標準教科書の開発検討などに一貫した大規模な構想である。また、このような観点から海外事務所に対して「各々のステータス⁽¹⁾による法的制約を逸脱しない範囲で基金ブランドのモデル講座を積極的に開設運営し、そこから発展的に拡充を図り、さらに将来的には基金日本語講座の採算化を目指す」ことも求められている。

このような国際交流基金全体の方針を受け、バンコク日本文化センター（以後 JFBKK）で行われている一般成人学習者を対象とした日本語講座（以後一般講座）についても内容、運営について再検討を始めることとなった。本稿はセンター開設当初から実施されてきた一般講座のこれまでの歩みを振り返るとともに、一般講座の再検討の取り組みを報告し、タイの日本語教育における JFBKK 一般講座の位置付けと役割について考察することを目的とする。

2. 一般講座概要

JFBKK の日本語事業ではタイ全土の日本語教育支援を行っているが、中心となっている現職日本語教師の支援とともに、日本語学習者の直接支援として民間日本語教育機関ではまだあまり開講されていない中上級レベルの学習者を対象とした一般講座を開講している。現在は前期（6 月～9 月）、後期（11 月～2 月）に各期 15 週、16 前後のコースが開講されている。

一般講座のコースではコース前にプレースメントテストが行われ、合格した人だけが参加できる（合格率は 57.5%、数値は 2005 年度前期のもの、以下同様）。参加している学習者は延べ人数で各学期約 300 人である。中級と上級のクラスが開講されており、それぞれ日本語能力試験の 3～2 級、2～1 級ぐらいのレベルである。一般講座は平日夜と土曜日に開講されているため、仕事が終わってから受講する社会人が多いのが特徴である（社会人は 78.1%、学生は 21.5%）。参加者のうち日系企業に勤めている人は 50%以上にのぼっている。また、運用力を高めたい日本語教師も参加している。受講理由は「現在仕事で必要だから」が一番多く、次に「日本語が好き」「日本語を忘れないため」となっている。

一般講座では、総合、技能別（文法、聴解、読解、会話、作文）、目的別（ビジネス、翻訳、通訳、能力試験対策、ドラマ、日本事情）のさまざまなコースが開講されている。講師は日本人講師、タイ人講師半々程度である。参加者は自分の興味や目的に応じて好きなコースに参加することができる。今期登録時に一番人気があったのは、中級では通訳のコース、上級では能験 1 級（日本語能力試験 1 級受験対策）のコースであった。日系企業では秘書、工場通訳など通訳の能力が求められることが多く、また、能力試験 2 級、1 級に合格すると給料が上がるという会社も多いという。そのため、仕事に即役立つ実用的な科目の人気の高い。一方、日本語や日本文化への興味から、趣味として参加している学習者のためには、ドラマや日本事情などのコースもあり、例えば、ドラマの授業では毎回日本で最近放送されたドラマで視聴率の高かったものから学習するドラマを選んでいる。

一般講座の学習者は会社や学校の本業が終わった後で参加しているという意味で熱心ではあるが、仕事や試験のため遅刻、欠席したり、ニーズに合わなければやめてしまったりすることも多く、ニーズに合った魅力的な授業をするためにはさまざまな工夫が必要である。日本語コースの継続理由の一つとして「友達に会えるから」というのも大きな理由で、クラスの雰囲気作りも大切な要素になっている。そのため、担当講師がそれぞれ工夫し、文法や読解、作文のクラスでもペアやグループの活動などを積極的に取り入れている。

3. 一般講座の変遷

バンコク日本文化センター一般講座は当初大使館講座として始まった。1969 年に一般成人対象の日本語講座として、在タイ日本大使館広報文化センター付属日本語学校が開設された。その後 92 年に設立された国際交流基金バンコク日本文化センター（現バンコク日本文化センター）に移管され現在に至る。

講師は当初、国際協力事業団（JICA、現国際協力機構）の前身である海外技術協力事業団から派遣され、その後、国際交流基金が設立されると交流基金よりの派遣に切り替わった。さらに現地講師も増員され、現在の一般講座専任講師は交流基金派遣講師 1 名、現地講師 2 名の 3 名体制

となっている。専任講師、非常勤講師を合わせると講師人数は10～15人ほどになる。

学習者は、開設初年度は初級者を対象とし、翌年度より中級クラスを増設した。その後、初級の応募者が急増し選考が難しくなり、また成人初級者を受け入れる民間日本語学校も存在するという理由により、75年度より初級クラスを廃止し、中級以上のクラスのみ開講することとした。講座を修了後も翌年度の継続を希望する学習者が多いため、上のレベルでクラスを新規開設し、適宜下のレベルを減らすということをして、当講座の日本語レベルは次第に上がってきた。現在の受講生の日本語レベルは、日本語学校としてはタイで一番高いと思われる。

講座内容は、当初、初中級は教科書を選択しそれに沿って四技能の向上を計る総合日本語クラスのみを開講していた。その後上級クラスなど一部のクラスでビジネス・日本語教授法などの目的別クラスを開くようになり、98年度より技能別・目的別クラスをほぼ全レベルに拡大し現在に至っている。

本講座の歴史についての詳細は表1を参照されたい。表1には本講座以外のデータも加え、本講座をタイの日本語教育および社会状況の中で見られるようにした。タイでも「おしん」ブームなど一時的に日本が注目されることはあったが、本講座の応募者には特に影響が見られなかった。これは、本講座が中上級者を対象としているため、短いスパンでの流行にはあまり影響されないと推測される。しかし、85年以降の日本企業のタイ進出増加には呼応するように講座応募者が増えている。理由として、本講座には日系企業社員が多いこと、この時期に講座を拡大し、受け入れ人数を増やしたことが考えられる。また、日本語能力試験受験者数は一直線に増加しており、この増加に応えるため当講座でも04年度より能力試験対策クラスを開いている。

4. 一般講座の再検討

モデル講座化の方針を受け、JFBKKでも外部の人にも学習者にとっても、よりわかりやすく、魅力的な講座にするために、2004度から他機関の開講講座の調査や定期的な会議を開き、その方針に基き2005年度から一般講座の内容の整理・充実、運営の効率化をすすめてきた。

4.1 他機関調査

4.1.1 他国類似機関

国際交流基金と同様の他国類似機関としてはイギリスのブリティッシュ・カウンシル、ドイツのゲーテ・インスティテュート、フランスのアリانس・フランセーズなどがある。各機関でも映画上映等の文化関連事業の他に一般講座と同様に一般成人を対象とした語学講座も開講している。例えばブリティッシュ・カウンシルでは3ヶ月単位、あるいは集中コースとして、初級から上級まで総合、会話、作文、ビジネスなどさまざまなコースが開講されている。プレースメントテスト受験料だけで600バーツ、1時間あたりの受講料は200バーツ程度と、収益事業として成り立っているようである。一方、JFBKKの場合はステータスの問題もあり、現段階では受講料はこれらの

機関の 5 分の 1 程度におさえられている。

4.1.2 海外事務所

国際交流基金の海外事務所では、既に述べたように 19 の海外事務所の内、8 つの事務所で一般講座が開講されている。このうち、バンコク、ジャカルタ、クアラルンプール、カイロでは中・上級レベルのコースのみが開講されており、ソウルでは 1 級合格者に限った上級コースのみが開講されている。一方、ローマ、ケルン、ブタペストでは初級からコースが開講されている。多くの国で中・上級のみ開講しているというのは、初級レベルは民間の日本語学校等も開講されているため、民間圧迫を避け、まだ学習機会の提供が不足している中・上級レベルのみ開講するという方針による。一方、初級の日本語教育も民間でそれほど広く行われていない地域、あるいは初級レベルでモデルとなる講座が必要とされている地域では初級から開講されている場合もある。現在、基金全体でも全ての海外事務所へモデル講座開設の可能性に関するアンケートを行うなどの動きがあり、他の海外事務所でも現在開講の可能性を検討しているようであるが、開講するにあたっては当該地域のステータス問題に加え、日本語教育の普及状況、マン・パワーの確保、民間圧迫にならない受講料設定などが課題となるようである。

これらの機関の中でも JFBKK の一般講座は歴史も長く、開講コース数や学習者数など開講規模も最も大きい。海外事務所での講座開設にあたり、JFBKK での講座変遷の歴史を振り返ることは、各国での日本語教育普及段階ごとの一般講座のあり方への参考になるかもしれない。

4.1.3 タイ国内の大手日本語学校

タイの場合は、日本語教育は中等教育、高等教育、民間日本語学校でも幅広く行われており、充実期に入っているといえる。しかし、民間の日本語学校ではいまだ初級レベルの開講に限られる学校がほとんどである。ここ数年大手の日本語学校では中上級コースを少しずつ開講し始めているものの、中上級を担当できる講師の確保が課題になっており、それに対する JFBKK への支援要請の声も挙がっていた。これらの声を受け、2004 年度にバンコクにある大手の民間日本語学校 2 校（泰日経済技術振興協会付属語学学校（略称：ソーソートー）、元日本留学生協会日本語学校（略称：ソーノーヨー））に訪問し、聞き取り調査を行った（表 2 参照）。

これらの学校での主な学習者は初級である。例えばソーソートーの学習者は述べ人数で年間 9000 人にのぼるが、そのほとんどは初級学習者であり、タイ人講師と日本人講師がペアになり授業を担当している。2 校とも近年中上級レベルの学習希望者も増えつつあるということだが、タイ人講師にとっては中上級レベルのコースは準備に時間がかかるなど負担が多いことなどから、引き受けてくれる講師が少ないという。そのため、中上級レベルのコースは日本人が担当することが多いが、日本人講師も人数が限られている。JFBKK 一般講座では中上級レベルのコースを開講することで、これらの民間機関で供給が不足している部分を補う役割を果たしているといえる。一方、現在 JFBKK 一般講座の受講料は民間の日本語学校の 2 分の 1～3 分の 1 程度となっており、

民間でも徐々に中上級レベルの講座開設が進みつつある現状では、受講料の安い JFBKK 一般講座に学習者が流れる可能性などにも配慮しなければならないだろう。

4.2 講座内容の整理・充実

上記のような他機関調査をもとに、一般講座ではよりモデル的な役割を果たすために、これまでの開講講座の変遷を検討し、より学習者にとって魅力的であり、バランスのいい講座開設に向けて、内容の整理と年間計画の作成を行った。

まず、これまで学習者のニーズや担当講師の得意分野に応じてアラカルト方式で開講されていたコースを整理し、総合・技能別のクラスを年間を通じて各レベルで受講できるよう、またビジネス日本語、翻訳等、学習者の多様なニーズにできるだけ応えるよう、05 年度にコース計画の大幅な見直しを行なった。表 3 に見直し後の 05 年度のコース計画と実際の開講コースを挙げておいた(04 年度の開講コースは表 2 参照)。前期・後期欄の網掛けが当初の計画で、●が実際に開講されたコースとなっている。計画と実際の開講コースに違いがあるのは、前期終了時の受講生アンケートの結果を反映させたためと、講師手配の都合による。

4.3 モデル講座化

JFBKK で行なわれているタイ人日本語教師の新規養成、現職日本語教師のための研修では、主に中高等教育における初中級向けの日本語教育を対象としている。一般講座では教師養成・研修を直接の目的としてはいないが、タイでの中上級日本語教育面での教師支援についても補完できるのではと考えている。

具体的にはまず 4.2 でも触れたように講座内容をより体系的に整理し、外部機関からの参考になるようにした。また、日本語クラスへの授業見学も随時申請を受け付けており、05 年度には 6 名の見学者を受け入れている。また、研究のためのアンケート調査、インタビュー調査などへの協力もできる限り受けるようにしており、05 年度には論文のための資料、他機関主催セミナーのための資料など 3 件の調査協力を行なった。その他、センター活動を広く知ってもらう広報の面でも、今年度はバンコク週報および産経新聞バンコク支局からの取材を受けている。このように、一般講座は教師のためのモデルとしてだけでなく、タイの日本語教育事情に関心のある人々への広報窓口としての役割も果たしているといえる。

また、JFBKK のウェブサイトには日本語部のページもあり一般講座の情報も掲示されている。ただ、現状では内容的にも提示方法の面でもまだ改善の余地があると思われるので、今後はインターネットのより有効な活用についても取り組んでゆきたい。

4.4 運営の改善

一般講座は前期と後期に分かれており、一般講座運営業務は各学期につき、学期前の準備、学期中の授業、学期終了時の試験・合否判定などがある。特に学期前の準備の業務量はかなり多いため、以前より運営業務の効率化に努めてきた。例えば、中級・上級を個別に行なっていた入学

試験を現行のプレースメントテストに一本化したり、以前は1週間あった登録期間を2日に短縮したりしてきた。現在とりかかっているのはプレースメントテストの効率化で、04年度まで原則全員が受験していたテストを、過去数年以内の能力試験1・2級合格者には免除することとした。結果、05年度前期18%、後期11%の受験者を減らすことができた。今後は前年度の当講座修了生も免除の対象に加え、さらに省力化することを計画している。

当講座は利益を出す必要がないということで、かつては一時期受講料が無料になったことがあった。しかし、それでは中上級学習者の多くを当講座が吸収してしまい、タイの民間学校での中上級クラス的发展を阻害するのではないかという恐れから、受講料を再び取るようになった経緯がある。現在の方向性としては、他の民間機関の中上級クラスと共存することを考え、他機関と同程度の受講料になるよう、徐々に受講料を上げつつある。

5. タイの日本語教育における JFBKK 一般講座の役割

最後に、タイの日本語教育における JFBKK 一般講座の位置付けと役割について考えてみたい。JFBKK はタイ及び周辺地域の日本語教育のさまざまな面からの支援を目指しているが、一般講座の果たす役割としては学習者支援、教師支援の二つの側面が考えられる。

学習者支援としては、一般講座の開講は日本語教育普及の足がかり、あるいは学習者需要に対し機関・教師の供給が追いつかない場合の学習者に対する直接支援としての役割を果たすものである。学習者に中心的機関としてみなされることで JFBKK の知名度の向上にもつながり、また直接学習者と接することでタイの日本語学習者の特徴や現状を知ることにもできる。充実期に入ったタイの日本語教育においては中上級に的を絞ることで、一般講座は一般学習者にとってタイで最もレベルの高い講座として一つの目標となっている。また、講座としてもレベルが上がれば上がるほど多様化するさまざまなニーズにきめ細やかに応えることができるといえる。

教師支援としては、一般講座への見学の受入、日本語教師の受講などにより、中上級の教授内容と方法の情報提供を行うことができる。また、中上級でさまざまなコースを開講できるというメリットを生かし先駆的・実験的教育を実践、公開することで、最新の日本語教育の海外ならではのモデルを示すことができる。将来的には教師研修の場にもなりうるかもしれない。

このようなモデル講座としての役割を果たすためには一般講座は内容的にバランスよく開講しておく必要がある。総合、技能別などを計画的に常時開講することが望ましく、また常に新しい教材や教授法、学習方法を取り入れ、紹介していけるような柔軟な体制も必要であろう。また、一般講座の講師もモデル的な役割を果たすことになる。この場合、日本人だけでなく、タイ人も講師となっていることが望ましい。タイ人教師だからこそできる科目（翻訳、通訳など）も開講でき、タイ人教師の授業を見学することなどで、タイ人教師ならではの授業設計のヒントを得ることができるからである。

また、一般成人対象ならではの役割も忘れてはならない。学校教育とは異なるニーズにも対応するものでありたい。一般講座ではコース開始時、終了時に常にアンケート調査を行い、学習者のニーズ把握に努めている。例えば、受講生の半数以上を占める日系企業に勤める社会人のニーズに応えるため、ビジネス、通訳、翻訳、能力試験対策などのコースを開講している。また、一般成人対象のもう一つのニーズとして趣味や生涯学習としての日本語というものがある。純粋に日本語が好き、日本語や日本文化社会についてもっと知りたいという人達のニーズに応えるために、一般講座ではドラマ、日本事情などのコースも開講している。これらのコースは一般成人対象だからこそ開けるコースであるともいえるだろう。

本稿ではJFBKK一般講座の歩みを振り返り、一般講座の再検討を通してタイの日本語教育における一般講座のあり方について考察した。海外の日本語教育の発展段階、ニーズはさまざまであり、各々の現状に最も適したものを模索していくしかないが、JFBKKでの歩みが他機関への参考となれば幸いである。今後も当講座の内容・運営の充実、改善に取り組んでいきたい。

注

- (1) 基金の海外事務所は大使館に準じた法的ステータスを有しているところが多い。つまり、大使館と同様タイ国への税金などが免除されており、普通の法人のように営業許可を得ているわけではないため、基本的に収益をあげるということを目的としていない。事業収益が出た場合は日本国への国庫返納という形をとっている。そのため、一般講座なども営利目的で開講しているわけではないので、必要以上の受講料収益をあげるということは法的ステータス上望ましくないという問題がある。

参考文献

<http://www.jcc.or.th> [盤谷日本人商工会議所ウェブサイト]

<http://www.jetrobkk.or.th> [JETRO Bangkok 日本貿易振興会ウェブサイト]

<http://embjp-th.org/> [在タイ日本国大使館ウェブサイト]

<http://www.jpf.go.jp/> [国際交流基金ウェブサイト]

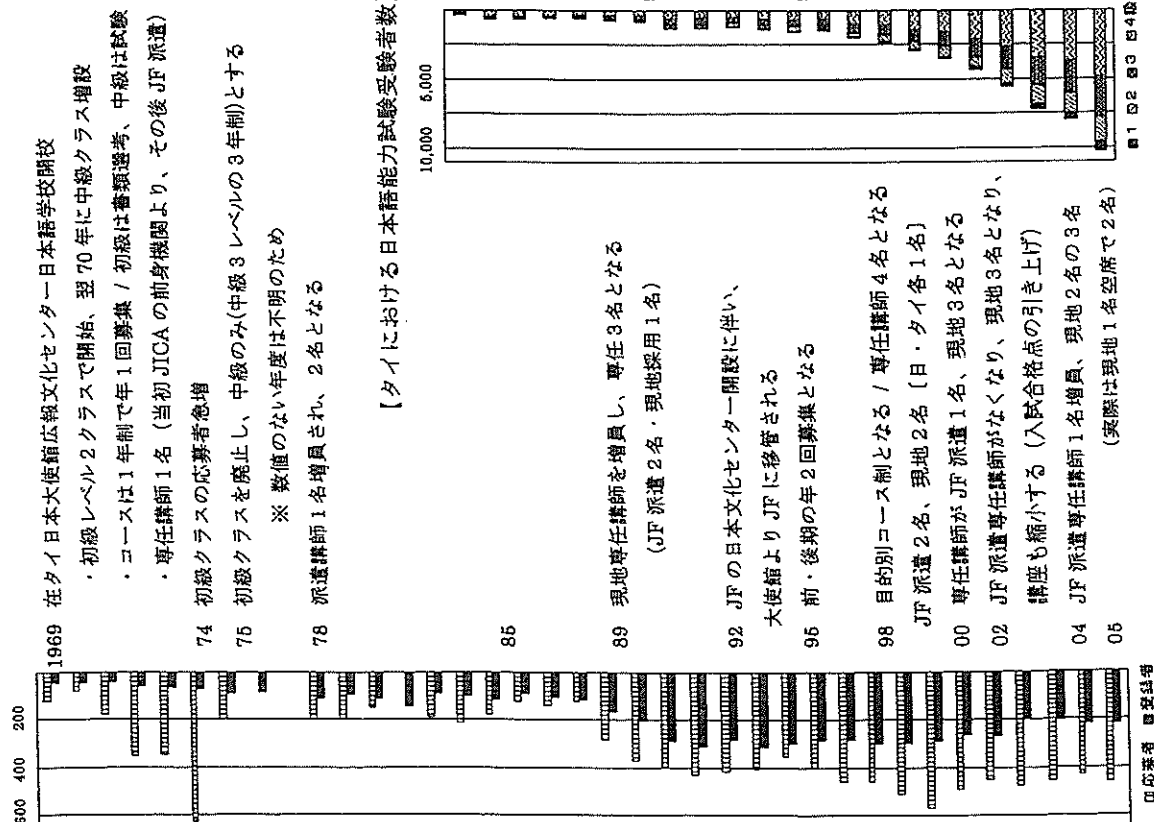
松井嘉和 (1995) 『タイ王国における日本語教育—その基盤と展開—』、大阪国際大学

国際交流基金・日本国際教育協会 (1996-2003) 『日本語能力試験 分析評価に関する報告書』

国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2004-2005) 『日本語能力試験 試験問題と正解』

表1 一般講座の歴史とタイの日本語教育

【一般講座応募者・登録者数】 【一般講座の歴史】



【タイの日本語教育】 【盤谷日本人商工会議所会員数】 【経済・政治事情など】

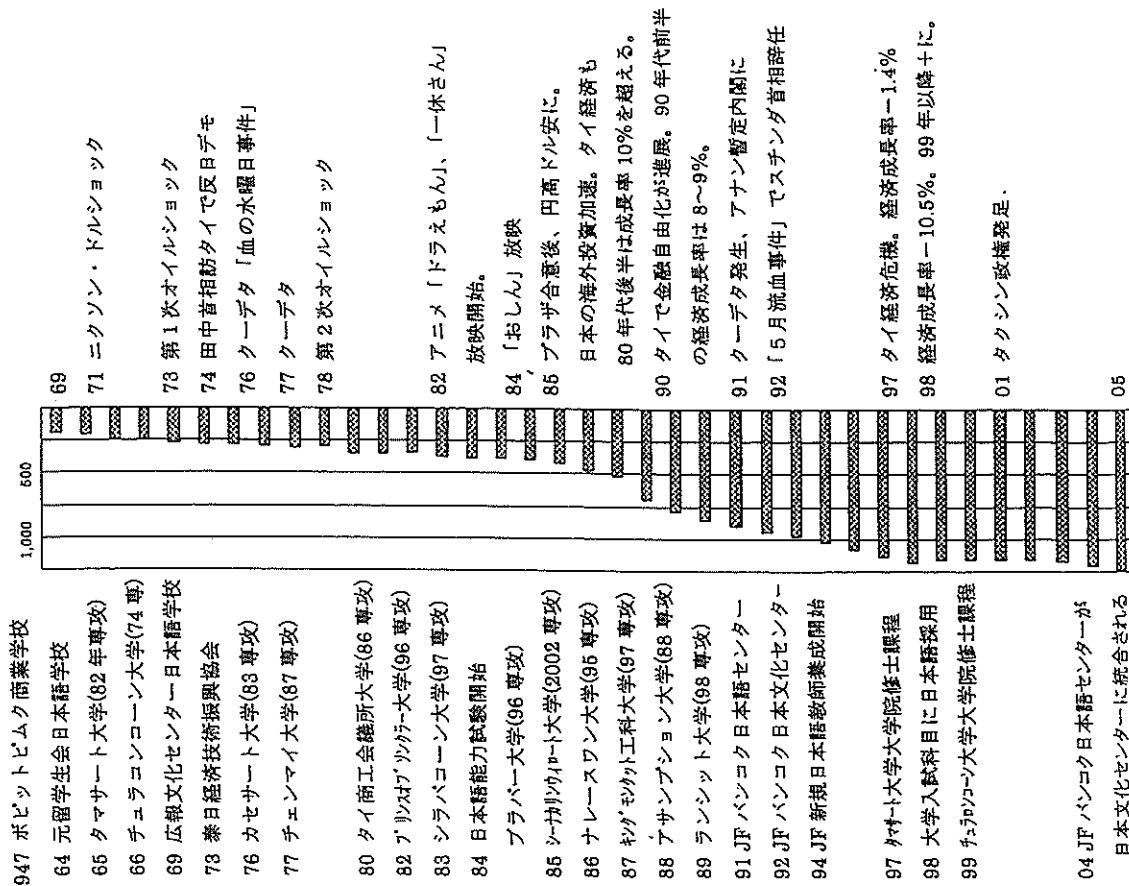


表2 バンコク民間日本語学校調査（中上級コースのみ、2004年調査）

	ソーノーヨー	ソーソートー	JFBKK
開講 コース	レギュラー・コース 日本語中級『中級の日本語』 （Japan Time）120時間 中級ビジネス会話『ビジネスのた めの日本語』 （3A ネットワーク）50時間 中級読解『日本語中級 J301』 （3A ネットワーク）120時間 上級読解『日本語上級 J501』 （3A ネットワーク）120時間 特別コース 2,3,4 級日本語能力試験対策『ステ ップアップ』 漢字中級『Kanji Intermediate 1000』（凡人社） 速読『速読で読む文化エピソード』	レギュラー・コース（60時間） M1『日本語初中級総合1』 M2『日本語初中級総合2』 M3『日本語初中級総合3』 M4『日本語中級総合1』 M5『日本語中級総合2』 A1『日本語上級1』 A2『日本語上級2』 A3『日本語上級3』 教科書：ソーソートー出版 特別コース（30～60時間） ジェトロビジネス日本語 （過去問題使用） 2 級能力試験対策（過去問題使用） ビジネス日本語（Thammasart 出版） 会話（ソーソートー出版）	レギュラー・コース（22.5 時間） 総合日本語（中級・上級） 文法（中級・上級） 聴解 読解 発音トレーニング 日本語コミュニケーション コンピューター日本語 ビジネスコミュニケーション ビジネス日本語 翻訳 通訳訓練の紹介 能力試験 1 級対策 ドラマで学ぶ日本語 *2004 年度前期開講コース
開講頻度	毎月 上記から 1、2 コース開校	レギュラー・コース 毎月 特別コース 3 回／年	2 回／年
開講時間 帯	月・水／水・木 10.00-12.00 16.30-18.30 18.30-20.30 土／日 8.00-10.00 10.00-12.00 13.00-15.00 15.00-17.00	火・木／月・水・金 18.30-20.30 土／日 8.30-11.45 13.00-16.15	火～金 17.00-18.30 18.45-20.15 土 10.00-11.30
定員 及び 終了率	定員 25-30 名／クラス （10 名以上コース開講） 終了率 平均 40-50% 全体	定員 25-30 名／クラス （10 名以上コース開講） 終了率 平均 75% 一部のみ	定員 15-20 名／クラス （定員の半数以上でコース開 講） 終了率 平均 60-70% 全体
学習者の 平均年齢	データなし（高校生 50%、一般人 50%）	データなし（大体 20 代）	24 歳（社会人 8 割、大学生他 2 割）
受講料 ／1 時間	約 80 バーツ	M1-M5 58 バーツ A1-A3 63 バーツ	約 22 バーツ
プレー スメン トテ スト	新しい学生には、レベル判定試験 がある （選択）	ソーソートーの教科書を参考に漢 字、助詞、動詞、副詞、短い会話 の読解などの問題を作っている。	日本語能力試験の問題を参考 に、聴解、読解、漢字などの問 題を作っている。
担当講師	タイ人 60 名（常勤 2 名） *初級コースのみ 日本人 7 名（常勤 2 名） *中上級コース担当	タイ人 60 名（2 名常勤） 初級～中級 日本人+タイ人 日本人 50 名（2 名常勤） 上級 日本人	タイ人 3 名（常勤 1 名） *中・上級のコース 日本人 7 名（常勤 3 人） *中・上級のコース
2005 開講予定	日本語上級、上級ビジネス会話 1 級能力試験対策、通訳	アニメの歌 1 級能力試験対策	総合、技能別、目的別の計画的な コース（表 3 参照）

表3 05年度の開講コース計画および実際の開講コース

	コース名	レベル	前期	後期	コース内容
総合	総合日本語	中級	●	●	中級総合テキストを中心に4技能を総合的に学び、中級レベルの運用力を身につける。
		上級	●	●	上級総合テキスト、生教材(ニュース、新聞)などを題材に、上級レベルの運用力を身につける。
技能別	文法	中級	●		中級文法を理解し、運用力を高める。(能力試験対策とは違う形式で)
		上級	●	●	上級文法を理解し、運用力を高める。(能力試験対策とは違う形式で)
	聴解	中級		●	基本的な聴解スキルを身につけ、聴解力を高める。
		上級	●		上級レベルの聴解スキルを身につけ、幅広い分野の話題に対応できる聴解力を高める。
	読解	中級		●	基本的な読解スキルを身につけ、読解力を高める。
		上級	●		さまざまなタイプの実際の日本語の文章を読み、読解力を高める。
	作文	中級	●		身近な話題についてまとめた文章を書く技術を身につける。
		上級		●	さまざまな話題、タイプの記事を書き、文章構成力、日本語らしい表現力を身につける。
	会話	中級	●	●	グループ会話、ディスカッション、ロールプレイ、発表などを通して、日本語で会話する自信を身に付け
		上級			グループ会話、ロールプレイ、ディスカッション、ディベート、発表などを通して、日本語で会話する自信
目的別	発音		今年非開講		日本語の単音、アクセント、イントネーションなどを学び、より自然な発音ができるように訓練する。
	ビジネス日本語	中級	●	●	ビジネス場面のコミュニケーション、Eメールのやりとりなど基本的なコミュニケーション力を高める。
		上級	●	●	ビジネス場面での企画、プレゼンなどのシミュレーションを通し、実践的なビジネス日本語力を身につける。
	翻訳	中級	●		短い日本語の文章を翻訳しながら、翻訳スキルの基本を身に付ける。
		上級		●	生の日本語の文章を翻訳しながら、翻訳技術を高める。
	通訳	中級	●	●	通訳入門として、通訳スキルの基礎を学ぶ。
		上級		●	プロの通訳者から通訳スキルを学び、実践的な通訳の力を身につける。
	能力試験対策	中級	●	●	日本語能力試験2級を目指す人を対象とした試験対策講座。
		上級	●	●	日本語能力試験1級を目指す人を対象とした試験対策講座。
	ドラマで学ぶ日本語	中級	●		最近放映された日本のドラマを通して日本文化と日本語を学ぶ。
		上級		●	最近放映された日本のドラマを通して日本文化と日本語を学ぶ。
	現代日本事情	中級		●	生教材などから現代日本文化、社会の最新事情を取り上げる。
		上級	●		生教材などから現代日本文化、社会の最新事情を取り上げる。